

## 助動詞「だ」と助詞「か」の結びつきをめぐって

三枝 令子

### 要旨

名詞述語の「だ」には、言い切り形の形では、助詞の「か」は後ろに続かないと言われる。本稿では、「だ」が述語であることを言い切り、「か」は不定を表すことが本来の働きなので、言い切り形では相互承接しにくいことをみる。しかし、埋め込み疑問節で、疑問詞を伴って疑問の意味が明らかに示されるときにはその結びつきは可能となり、さらに「か」が不定という陳述性を全く持たない並列の意味の時には「だ」と「か」は、例をあげるという積極的な意味を持って結びつくことを観察する。

### キーワード だか、「だ」の陳述性

#### 1 「だ」の働き

##### 1.1 「XはYだ。」の意味と働き

「XはYだ。」という名詞述語文において、「Yだ。」という述部は、基本的に形容詞的である。こうした指摘はすでに、三上 (1953)、鈴木 (1972)、川端 (1976) 等に見られる<sup>1</sup>。たとえば、鈴木は、この点について「名詞が述語になるばあい、基本的にはそれは主語によって示されるものやことからの性質や状態をあらわす。一般に名詞はものやことからのをさしめすが、述語になっているばあいには、そのものやことからのもっている属性 (性質や状態) が問題にされるのである。」<sup>2</sup>と述べている。「XはYだ。」は、「は」によってXというものごとを取り立て、「だ」によってXをY (だ) という事態のありようと結びつけることがその主要な機能であると考えられる。だから、尾上 (1982) が言うように「A (ここでのX) とB (Y) を並べて一つの事態が状況依存的に想像され得るような場合はすべてこの文型は可能」<sup>3</sup>になる。よく例に出される「ぼくはうなぎだ」文についても述語の代用と考えたり分裂文を設定する必要はないことになる。

ところで、「XはYだ。」の述部が形容詞的でない場合もある。それは、次のように述部が指定の代名詞と人称代名詞の場合だ。

(1) 私の湯飲みはそれだ。

(2) 問題の箇所はここだ!

1 三上章 (1953) 『現代語法序説』くろしお出版、鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』むぎ書房、川端善明 (1976) 『用言』『岩波講座日本語6 文法1』岩波書店

2 鈴木 (1972) 411頁

3 尾上 (1982) 110頁

(3) 電話したのは私だ。

代名詞、人称代名詞は指定、指示の働きを持つものなので、「Yだ」の部分にあっても、形容詞的なふるまいはしない。こうした例では、「だ」は発見の意味合いを帯びやすい。

## 1.2 「Yだ」の陳述性

書き言葉の「XはYだ。」文には、通常聞き手目当ての陳述性はさほど強く感じられない。もとより、陳述性を持たない文は存在しないし、また、「である」体が響きが固く、居丈高な感じがする一方、「だ」には、話し手の気持ちがストレートに出る感じがある。

「Yだ」が明らかに陳述性を帯びる場合としては、大きく次の二つの場合があげられる。

- 1 「だ」という述語の持つ陳述性
- 2 「だ」がメタ表現を受ける場合

1は、尾上(1982)があげている次のような例のことをいう。

(4) 水だ！(水をくれ)！

(5) がまんだ。待ってろ

もともと言い切り形というのは、動詞がそうだが、陳述を担うことができる。たとえば、「早く座る！」「青い野菜も食べる！」は命令ともなり得る。だから、「Yだ」も述部である以上、例文(4)(5)が命令の意味を担うのは当然と言える。動詞の言い切り形は、命令の他にも「食べる！」と意志を表すが、名詞述語文ではこれは次のような例に当たるだろう。

(6) 「さあ張った張った。丁か半か！」

「うーん、どうするかな・・・えーい、半だ！」(杉浦<sup>4</sup>から)

(7) さあ、ここは買いだ。

ところで、動詞では言い切り形によって「食べる？」と疑問も表せるが、名詞述語の場合にはそれはできない。この点については次節で考えることにする。

「Yだ」が陳述性を帯びるもう一つの場合というのは、次のように「だ」がメタ表現を受ける場合だ。

---

4 杉浦滋子(1993)「「ぼくはうなぎ」と「ぼくはうなぎを」」『東京大学言語学論集』13 296頁

- (8) コレ、俺から君におみやげ。——ケッ、なーにが俺から君だよ。(今日から)  
(9) 「——ヘン、だ」春美はロビーを出ていく片山たちを見送って、「日本の男はこれだから!・・・(オペラ)  
(10) 早くしろ!——早くしろ、だ?  
(11) ・・・おれは死んでも口を開かない。何があつてもだ! (金田一)  
(12) はやりもいいものだ、と思う。すたりさえしなければ、だ。(朝日新聞)

これらの用例では、Yは名詞ではなく、叙述内容を持った発話であり、それをさらに「だ」が受けるという構造になっている。Xに当たるものがそこに示されていないとしても、その場の状況を「は」で取り立て、そして、自分の発話もしくは聞き手、第三者の発話を述部で述べ、さらに「だ」を付け加えている。この場合の発話は、命令文、疑問文、感嘆文となんでも可能だ。つまり、ここでは、叙述がすでにおこなわれているその外側にさらに叙述が加えられるという構造になっている。当然、その叙述内容は強調されるから、陳述性が強く感じられることになる。この「だ」は、完結した文を受けるものだから、全体の構造は「XはYだ」の形になってはいるが、働きとしては終助詞に近い。

庄司(1992)は、「丁寧体である「デス」は男女を問わず普遍的に使えるのに対し、普通体の「ダ」が、使用に際して男女の制限があるという事実」、そして、「「ダ」のもっているような文法的に主要な位置を占めているもので、なおかつ使用に際して男女差があるという形式は、見当たらない。」<sup>9</sup>ことを指摘している。確かに、次のように「だ」で言い切る文は、もっぱら男性が用いる。

- (13) 君! やめたまえ! それは誤解だ! (オペラ)  
(14) お兄さん。ホームズは?・・・さあ。どこかへいっちまったみたいだ。(オペラ)

そして、庄司は、丁寧体の「です」に対応する普通体としては「だ」を削除した形を提案する。しかし、この点については次のような問題点があげられる。一つは、庄司自身が注で述べているように、女性でも「あっ、これはピワの木だ。」と、聞き手を前提としない眼前描写の類の文では「だ」を用いる。また、女性も次の例のように「だ」を用いないわけではない。

- (15) 警官はどこも同じだわ。(オペラ)  
(16) 本当に音楽を愛してるんなら、そんなことできないはずだもの(オペラ)

かりに、「だ」を削除した形が普通体だと考えると、「だ」は終助詞と考えざるを得ない。しかし、文末の「だ」にも「昨日は雨だった。」とアスペクトの働きがある。また、「だ」を削除した文、たとえば、「春は曙」「子はかすがい」というのはいわゆる名詞文だが、これは堀井(1974)にあるように、「常に一般的性格の断言に用いられ、格言風の文体に使用される。」<sup>6</sup>という別の機能を持っている。話し言葉の文末の「だ」は強い陳述性を持つがために、女性はその直接の使用を避けていると考えればいいのではないだろうか。

従来、間投助詞の「だ」として扱われてきたものも、上にあげたYがメタ表現の場合と同じように考えてよいだろう。金田一(1953)の「不変化助動詞」と言われるものは、この間投助詞の「だ」を取り上げたものだ。次の用例が金田一にあげられている<sup>7</sup>。

- (17) 媒酌人をすることはだ、言うなれば、ホルモン剤のようなものじゃよ。そこで  
だ、あんたに頼みがあるのだが・・・

金田一は、「不変化助動詞」を、「話者のその時の心理内容を主観的に表示する」もので、「主観的表現に用いられる語は文の末尾にしか立ち得ない。」から、終止形しか持たないと述べている。ただ、終止形が現れるのは、「結果はともかく、このままだときっと後悔するし(会えて)」のように、条件の接続助詞「と」の場合もそうだから、「だ」が何に続くかがより重要なことだろう。

### 1.3 なぜ「今日は水曜だか？」が言えないか。

「今日は水曜だ。」という名詞述語文を疑問のイントネーションで発話しても疑問文にはならない。「今日は水曜だ？」には、問い返しの意味が入る。同じスピーチレベルで疑問にするとしたら「今日は水曜?」、男性なら「今日は水曜か?」となるだろう。動詞の言い切り形は「食べる?」と、そのまま疑問の意味を持つのに、名詞述語でそれが出来ないのはなぜだろうか。それは、実質的な内容を持つ動詞と違って、「だ」は実質的な内容を持たないが、しかし、「述語である」ことを言い切る働きがあるためだと考えられる。「述語である」ことを示す働きそのものは疑問に転用できない。「今日は水曜だ?」が問い返し疑問文になるのは、述語であることを言い切ったその上に疑問が付されると言うことで説明できる。イントネーションも、いったん下がって上がる。「だか」という結びつきがないことについてはこれまでも多くの指摘がある<sup>8</sup>が、その理由を述べたものとしては、筆者は渡

6 堀井(1974) 47頁

7 金田一(1978) 211頁

辺 (1971) しか知らない。渡辺は「判定とのつながりにおいてはたらく「か」は自ら統叙疑問文を形成するが故に、桜だか? のように単純統叙の「だ」に下接することがない。」<sup>9</sup>と述べる。つまり、叙述を完了させるもの同士だから相互承接しないということを述べている。

「今日は水曜だ。」を疑問文にするためには、話し言葉では「今日は水曜?」と名詞のままに「だ」は加えない。しかし、疑問詞がある文では、「だ」がなくてもいいが、次のように「だ」を使うこともできる。

(18) どうした、こんな時間に。なんの用だ? (金田一)

(19) おかしいと思わないか、オッサン——何がだ? (金田一)

これは、疑問詞があることで疑問が明示されるためと考えられる。ただし、この場合も「だ」を使うのは男性に限られていて、女性は普通このように表現しない。

「だ」の丁寧体と言われる「です」は、次の (20) の左側の a~d の形で疑問文になる。比較のために、右側に「だ」の表現を並べる。( \* は非文を表わす。)

- |                 |               |
|-----------------|---------------|
| (20) a 今日は何曜です? | a' 今日は何曜だ?    |
| b* 今日の水曜です?     | b' * 今日の水曜だ?  |
| c 今日は何曜ですか?     | c' * 今日は何曜だか? |
| d 今日の水曜ですか?     | d' * 今日の水曜だか? |

a が言えて、b が言えない<sup>10</sup>点は「だ」と同じだが、c、d は「だ」では言えない。「だ」と「です」が単にスピーチレベルが違うものだと考えられない点は、先の庄司の指摘の通りだ。「です」は、「おいしいです。」と形容詞にも接続するところから、丁寧化することが主要な働きで、述語化する働き、ひいては陳述性が弱いと考えられる。なお、c' の「今日は何曜だか?」は不自然だが、「彼は、いったいつ来るんだか。」のように、後に見る埋め込み疑問節の、主節の述部が省略されたような表現は可能である。

8 たとえば、宮地裕 (1979) 『新版文論』明治書院250-251頁、田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法 1 「のだ」の意味と用法』和泉書院148-149頁、益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版27頁

9 渡辺 (1971) 147頁

10 井上史雄 (1998) 『日本語ウオッチング』岩波書店によれば、最近、女性店員が客に「スーツです?」と話しかける「カ抜き」現象が見られるという。

## 2 「か」の働き

### 2.1 「か」の陳述性

「か」は基本的に「不定」を表す。渡辺 (1971) は「か」に陳述性を認めるが、それが常に言えるのは文末にある場合で、文頭、文中、文末という文内の位置と、何が前に来るかによって陳述性が異なる。イントネーションのない地の文では、疑問文には「か」が疑問の要素として必要だが、実際には、話し言葉の言い切り形の文末では、疑問文に「か」を用いないのが普通だ。庄司 (1992) は、疑問化要素の強さとして 1 疑問語が存在する 2 上昇調イントネーションを文末におく 3 疑問助詞「か」を文末におく の三つをあげ、しかも、この順で疑問化が弱くなることを観察している。「か」が文末にある場合を考えてみよう。

男女共用	男性のみ	男女共用
行く？	行くか？	行きますか？
水曜？	水曜か？	水曜ですか？

「だ」と同様、「か」も男性用の終助詞と化している。ただし、女性も文末に「か」を使う場合として、次の二つの場合があげられる。

- 1 自問の「か」
- 2 誘いかけの「か」

1の自問の「か」は、目の前の出来事や相手の発話を確認する場合に使うもので、聞き手の存在が前提にされない。

- (21) 支度をしてメモを手に、部屋を出る。「カプツィーナ教会か」と、メモを見ながら、エレベータで一階へ (オペラ)
- (22) 「それは、なんだな、新田君にたいしてすまないという気持ちからだな」  
「そうね。それは食欲の問題よりも愛情の問題だわね」と、娘は言った。  
「なるほど、そうか」うまいことを言うと思った。重太郎が考えていたことを、娘は適切な言葉で言えた。食欲よりも愛情の問題か。そうだ。それである。  
(点と線)

上の例は、仁田 (1991) で、疑問表現の一つ「自問納得」と呼ばれているものに当たる。森山 (1992) は、(21) (22) のような文を、情報が他から伝達されるので「伝達用法の疑問型情報受容文」と呼び、次のような文を「発見の疑問型情報受容文」と呼ぶ。

(23) (勉強して、ふと時計を見て) あ、もう10時だ。(森山<sup>11</sup>から)

「発見の疑問型情報受容文」では、新情報を話し手自らが得る。しかし、いずれの場合も、結局は話し手にことがらが確認・納得されるのだが、その前提として、話し手にいったんことがらの不定性が示されているのがわかる。次の例文(24)は、スポーツニュースの実況だが、聞き手は現に存在するけれども、自問の形を取って発話することで、聞き手を話し手のいる場や立場に引き込む効果を生んでいる。

(24) 一回目のジャンプ、今、一人目のグループが飛んでいます。チェコのスハチェクが飛びます。19歳の若手ジャンパー。あつと、ちょっとバランス、崩したか。(丸谷<sup>12</sup>から)

2の誘いかけの「か」は、「行こうか」の「か」に当たるもので、これは上の1とは異なり、聞き手を前提にしている。しかし、仁田(1991)にあるように、「「シヨウ」の〈誘いかけ〉に対して、文形式が疑問表現であるということから、聞き手への問いかけといった意味合いを残し、その分、聞き手への配慮を有しており、丁寧」<sup>13</sup>なため、女性も使う表現になっている。

## 2.2 文中の「か」

文中に出てくる「か」としては、まず、引用文に取り込まれる疑問文の「か」があげられる。引用の「と」は、引用される部分を概念化するので、陳述性のあるどんな文でも取り込むことができる。しかし、「だ」と「か」の組み合わせについて言えば、言い切りの形で「今日は水曜だか。」とは言わないので、「だ」「か」の結びつきは、引用文にはあらわれない。

文中で、「だ」「か」が結びつくのは、埋め込み疑問節を作る「か」と並列の「か」の二つの場合である。

埋め込み疑問節の場合、主節とのかかわり方は様々だが<sup>14</sup>、いずれの場合も、次の例(25)のように疑問詞があれば「だ」はあってもなくてもいい。これは先に見た単文の場合と同

11 森山(1992) 35頁

12 丸谷しのぶ(1998)「カ従属節とはどのような表現か」『一橋大学留学生センター紀要』創刊号103頁

13 仁田(1991) 159頁

14 埋め込み疑問節と主節の関係について論じたものに、たとえば、山口佳也(1992)「文節末の「か」の用法」『日本語史の諸問題 辻村敏樹教授古希記念論文集』明治書院、藤田保幸(1997)「従属句「〜カ(ドウカ)」再考」『滋賀大学教育学部紀要』がある。

じ原理だ。

(25) 持ち主が誰 {だか/か}、知らない。

(26) 持ち主が田中さん { \*だか/ ?か/だかどうか/かどうか } 知らない。

しかし、疑問詞がないときには「だか」という接続はなく、普通 (26) に見るように、並列の「か」が埋め込み疑問節の中に組み込まれる。その場合には「だ」があってもなくてもいい。そもそも、なぜ、文中ではこうした「だか」の結びつきが可能なのだろうか。それは、不定の「か」が「だ」に後接することによって、「だ」が陳述性を失い、叙述に押し戻されるためと考えることができる。不定の「か」によって、前に陳述性のある文が来ても、全体が不定の意味に包み込まれてその陳述性を失う。これは、連体修飾句の用言や引用節の被引用節が陳述性を失うのと似ている。ただ、連体修飾句は体言につらなり、引用節は「と」による概念化の働きという点で異なっている。

ところで、疑問詞が「だ」「か」と結びついてできた副詞的な表現がある。これにはちょうどペアのように「だ」のない用法がある。疑問詞があれば可能な表現なので「何人だか、いくつだか、何時だか」等、いろいろあり得るが、主だったものは次の表現だろう。

いつか	いつだか
だれか	だれだか
どこか	どこだか
なにか	なんだか
どうか	どうだか
どれか	どれだか
どっちか	どっちだか

左側の、疑問詞に直接「か」が接続した場合は、叙実性が全く失われ、不定の“もの”を意味する。一方、右の「なんだか」「どこだか」類では、「だ」によってその基本である「述語」であることは示されるので、不定ではありながら一種の文としての要素がおかれることになる。すなわち、そこに具体的な例があげられていることになる。

(27) {なんか/\*なんだか} おもしろいことない？

(28) { ?いつか/いつだか } あなたとその問題について話したことがあるね。

上で、疑問詞がある場合に、「だか」という結びつきが可能なことを見たが、疑問詞がなくても「だか」の結びつきが可能な場合がある。それは、ことがらを並べ立てる場合の



「だか」である。ここでは「か」は並べ立てる働きをしている。

- (29) 彼女は雨の向こう側だか雨のこちら側だかを眺めているみたいに見えた。(中国行き)
- (30) 寝室の電話が鳴った。それは弟のほうの親類の女性からだった。弟が、昼間、脳内出血だか心筋梗塞だかで倒れた。救急車を呼んで入院させたが、いま現在、心臓の動きは止まっているという。(庭の砂場)
- (31) ……嘘をついたときでも、ハッキリそう白状してくれればいいの。それをあなたは最後まで、嘘だか本だか、騙すのか騙さないのか、ハッキリしてくれないでしょう。(夢みる女)

「だか」は同じく並立の意味を持つ「だの」とは異なり、一語とは考えられていないようだが<sup>15</sup>、用例を見てみると、「だ」のあるなしは意味に違いをもたらしている。「～か～か」では、あれかこれかという二者択一の意味しか持たないのに対して、「～だか～だか」では、前に来る語句が文として提示され、「たとえば」という意味になる。表現されているのは、一つの例であって、場合によってはそれ以外の可能性もあるという含みを持つ。たとえば、上の用例(30)で、「～か～か」は使えない。この「だか」は、次の例のように、たとえ、表現の上で並列されるものがなくても用いられる。

- (32) 彼女は26日だかに来るそうだ。

### 3 おわりに

名詞述語の「だ」と助詞の「か」は、それぞれ、述語であることを言い切ること、不定を表すことが本来の働きなので、「～だか。」という言い切りの形では、一般に相互承接しにくい。しかし、埋め込み疑問節で、疑問詞を伴って疑問の意味が明らかに示されるときにはその結びつきは可能となる。さらに「か」が不定という陳述性を全く持たない並列の意味の時には「だ」と「か」は、例をあげるという積極的な意味を持って結びつく。しかし、そもそもこうした言語現象を発話者の発話する際の意識から考えてみれば、「だか」と言ったときには、ここで言い終わるのでは不安定な感じがするので、後ろに「わからない」「知らない」「不安だ」と言い続けたり、並列の表現にすることによって、より安定した表現にしているということができる。

15 たとえば、『新明解国語辞典第三版』三省堂、『大辞林』三省堂、『現代語の助詞・助動詞』秀英出版では、「だの」は扱われているが、「だか」は取り上げられていない。

参考文献

- 金田一春彦 (1953) 「不変化助動詞の本質—主観的表現と客観的表現の別について—」『國語國文』22巻  
2-3号 (『日本の言語学3巻文法1』1978大修館書店所収)
- 渡辺実 (1971) 『国語構文論』塙書房
- 堀井令以知 (1974) 「名詞文の機能」『アカデミア』97
- 尾上圭介 (1982) 『「ぼくはうなぎだ」の文はなぜ成り立つのか』『国文学 解釈と教材の研究』27巻12  
学燈社
- 松村明編 (1989) 『日本文法大辞典』10版 明治書院
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 森山卓郎 (1992) 「疑問型情報受容文をめぐって」『語文』59 大阪大学国語国文学会
- 庄司育子 (1992) 「疑問文の成立に関する一考察 —「デス」という形式をめぐって—」『日本語・日本  
文化研究2』大阪外国語大学
- 三枝令子 (1992) 「名詞の形容詞的ふるまい—名詞述語文についての一考察—」『ソフトウェア文書のため  
の日本語処理の研究-11 計算機用レキシコンのために (3)-』情報処理振興技術協会技術センター
- 三枝令子 (1993) 「動詞・形容詞の名詞的ふるまい」『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究-12  
-名詞辞書にかかわる諸問題-』情報処理振興技術協会技術センター
- 泉子・K・メイナード (2000) 「日本語表現の情意—「だ」と「じゃない」の場合—」2000年3月30日東  
京女子大学における講演レジメ

資料

- (中国行き) 村上春樹 (1986) 『中国行きのスロウ・ボート』中公文庫
- (オペラ) 赤川次郎 (1990) 『三毛猫ホームズの歌劇場』角川文庫
- (庭の砂場) 山口瞳 (1993) 「庭の砂場」『せつない話』光文社
- (会えて) 石井ゆうみ (1993) 『会えてよかったね』講談社
- (今日から) 西森博之 (1994) 『今日から俺は!!19』少年サンデーコミックス 小学館
- (金田一) 天樹征丸 (1994) 『金田一少年の事件簿1. オペラ座館・新たなる殺人』講談社
- (夢みる女) 安岡章太郎 (1955) 『質屋の女房』新潮社
- (点と線) 松本清張 (1971) 『点と線』新潮社